The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	下河邊長流碑の修復再建
Author(s)	羽倉, 敬尚
Citation	懐徳. 1976, 46, p. 13-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90539
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

下河邊長流碑の修復再建

羽倉敬尚

去る昭和四十八年十月、表題の下河邊長流と懷德堂との學緣關係につき、周邊關係事を併せ詳述し二十頁の拙文を當誌に寄せ、文中これより先、大正十四年、長流同鄕奈良縣宇田郡伊那佐生れで歌人實業家、山田安民翁（ロート製藥創始者、入江お歌所長門人）及び近世碩學達の作品蒐集、その傳記研究の篤學、大阪住、船舶業の實業人森繁夫氏と共に三名が發起人となり、入江子、佐々木信綱翁及び山田氏令弟、貴族院議員津村重舍翁ら有志百六十名らの物心兩面の贊助後援のもとに、早く失われた長流墓に代えて、長流の學弟（十五歳若い）萬葉研究の僧契沖の墓のある現、大阪市天王寺區空淸町四番地、圓珠庵（史蹟指定の契沖庵居の寺、並びに墓域）内に、同年六月三日、恰かも長流二百四十年紀に、契沖墓と略々同じ規模で、墓に代えて「贈正五位下河邊長流大人碑」の一基が完成し、併せて寺の門前、左側の契沖庵居及び墓の史跡指定の標石に倣ひ右側に長流碑の石標を建てたことを述べた。同日盛大な除幕披露法要が勤行せられた。當時の寺の庵主は喜多覺隆師、恰かも、現契信庵主の實祖父ある

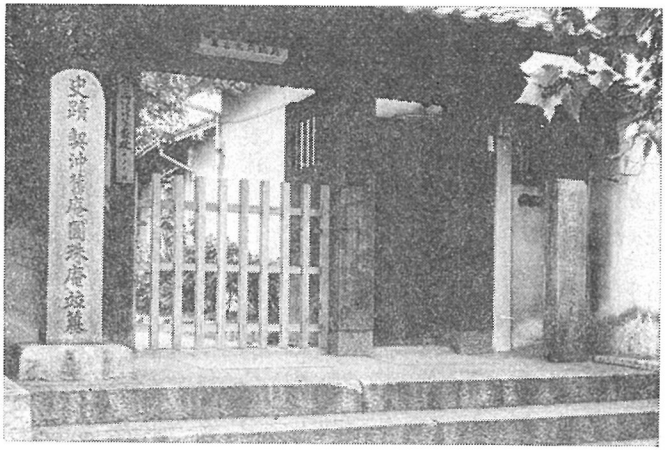
この法要には、兼々建碑に一方ならず關心を寄せられた佐々木翁が、ワザワザ西下して參加せられ、且つ當日の朝日新聞大阪版、「一日一文」の題下に六、七段にわたる長文の感想と喜びを寄せられた。全文は本誌の前拙文にのせたが、この文を讀まれる人の爲めに、冒頭を左に再錄する。

本月本日（大正十四年）六月三日、は大阪に關係深い國學者、下河邊長流大人の沒後、二百四十年に當るので、その墓碑が、山田安民、森繁夫、羽倉敬尚三氏の發起のもとに、生前莫逆の交りのあった、契沖阿ジャ梨の墓と並ん

（拙筆）

で、大阪東高津圓珠庵に建てられたのである。浪華人物誌（注、文政七年〔一八二四〕刊、毛生介華著）に「長流の墓は玉造の東の大今里村にある由、葛城氏の筆記に見えたれども、今廃してなし」とあるを以て見るに、その廃墓となったのは久しい以前のことで、大正四年、今上帝ご即位に際し、その遺功を追賞して正五位を贈られたが、之を告ぐる碑も無く子孫もない。今回その碑が建てられた事は、實に喜ばしい極みである。以下略

と、眞にこの通りで、永い間、タシカに建てられた先賢の墓が、失われて隨分永年その儘捨てられてあったのは、マコトに先靈に對してお氣ノ毒の感を禁じ得ない。思うにこの頭初の建墓は、その大今里である處から見て、その地には學弟契沖の在住した妙法寺があり、その飛地の墓域に、契沖によって建てられた様に想われるが（靈牌「吟叟長流居士」一基は圓珠庵に傳存して



おると聞く）妙法寺記によると、アノ邊は度々洪水の被害がある由だから流されたのであろう。

ついでこの大正末年の折角の再建碑が又、昭和戰災に猛火をかぶって無慘に壞破したのである。マサカ故靈コンナ處にわが碑を立てるなとの示唆ではなかろう、唯、門前の標石は幸いにその儘である。

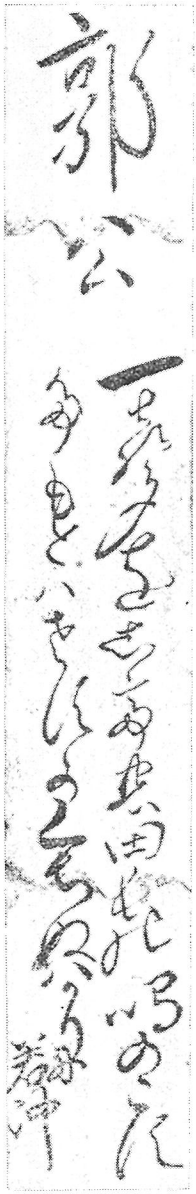
こえて昭和三十年六月二十五日、八十四歳、志厚い佐々木翁（同三十八年九十二歳歸幽）は、西下の機に、訪寺展墓し、間のあたり、この慘狀を見て、その感慨を、自叙の隨筆「作歌八十二年」三五九頁に

長流翁の碑はいたんでおり、香華を手向け低回去る能はざる思ひがした。

と述べておる。

前後するが、上述大正十四年、長流建碑の後、星想既に移り、當年の發起人三名の中、山田翁は昭和十八年四月、七十五歳、森氏は同二十五年六十九歳で各々歸幽して既に亡く、唯一人、生殘の余のみ馬齡を積み、余喘を保って、亡き發起人二兄から暗示を得たかの感もなされ、揣らずこれ修復再建を思い立ち、先づ東京住の水戸人矢數道明醫伯によって、東京住の前記、故父君經營の中將湯藥製造繼承の津村翁令嗣、重舍氏及び同氏を通じて大阪住の安民翁令嗣山田輝雄社長を語らひ、應分の寄財を仰ぎ、大阪では賴山陽、祖母の實家で、先代に有賀長伯門の高弟歌人彦文あり、從って歌人業績に深い關心を持つ、大阪住法曹人、道工（どうく）隆三さんにも陰の支援を受け、その他には廣く募財を求めないで伏見稻荷住の石材商石駒伊藤主人の奉仕執

長流門人、海北若沖



（森　繁夫氏「名家筆跡考」）

業によって、今、昭和五十一年九月、遂に再建を完了したのである。

長流の一般行歴については、前年の拙文中に隨分くわしく前人各位發表を羅列援引して述べたから再び繰り返さないが、この再興の機に二三僻見を補っておく、

その一は長流の出自である。これについては、結局杳（よう）として知られておらない。五十年前、建碑の前、發起人三名が、長流實家の稱號、小崎と長流の嗣いだ母の實家下河邊を手ガカリに、山田翁案内東道で、翁の塾地を殆んど半日がかりで徒歩巡査した、確かに小崎氏には二三出くわして問うがユカリにはブチ當らなかった。これらは「長流事蹟考」として孔版拙作を作り、契沖及び長流全集編集の佐々木翁に提送した。全集には書名だけがのせられておる。

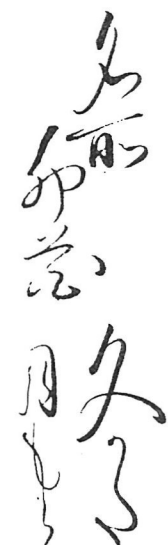
長流が豊臣の族、木下勝俊入道長嘯に入門し、その歌道を受け、師亡き後、その著林葉累塵集等にこの先師の遺唱を多く加えおさめたこと、更に長流、大阪に出で初名彦六、具平を修して、初め長龍のち長流と稱したのは市内大川岸に卜居したのによるのであろうが、長の一字には何だか先師との縁を連想させられる。

ここで、複雑乍ら木下長ショウの系を探って見る。彼れは太閤秀吉の甥卽ち妹の子で、後の關白秀次（文祿四、自刄二十八歳）の同母弟（逆算すると秀次の二歳弟）太閤秀吉の母が筑阿彌に嫁して生れた智子（後の瑞龍院日秀尼秀吉の異父同母妹）で、父は三好一路、勝俊初め名は秀俊、秀吉の實弟後の大和大納言秀長（天正十九年若死）の養子となり、

太閤一門として、權門連枝の一家を繼ぎ文祿三年、二十五歳、若狹小濱に封ぜられ、八萬石余を領知、左近衛權少將に任ぜられた、これより先、天正八年に足利將軍家世臣名門で文武兼備の稱ある細川藤孝後の號幽齋入道玄旨が四十七歳で比隣、丹後ノ國、田邊城（現舞鶴の東）に移封入部した。藤孝は堂上歌風を嗣いで當時一世風靡の名歌人歌集衆妙集あり勝俊は兵馬倥偬の閑、この六秩の老歌匠藤孝に歌道を學び、殆んどその蘊奥を極め、更に慶長九年には中ノ院素然通勝に古今傳授を受け、自らはそれらの師法を超えて新風に達し、異彩を得るに至った。

夕されば雲吹き渡る山風に一聲すごく雁鳴き渡る

唯一首であるが、堂上傳授の舊套を脫した讀み振りである。

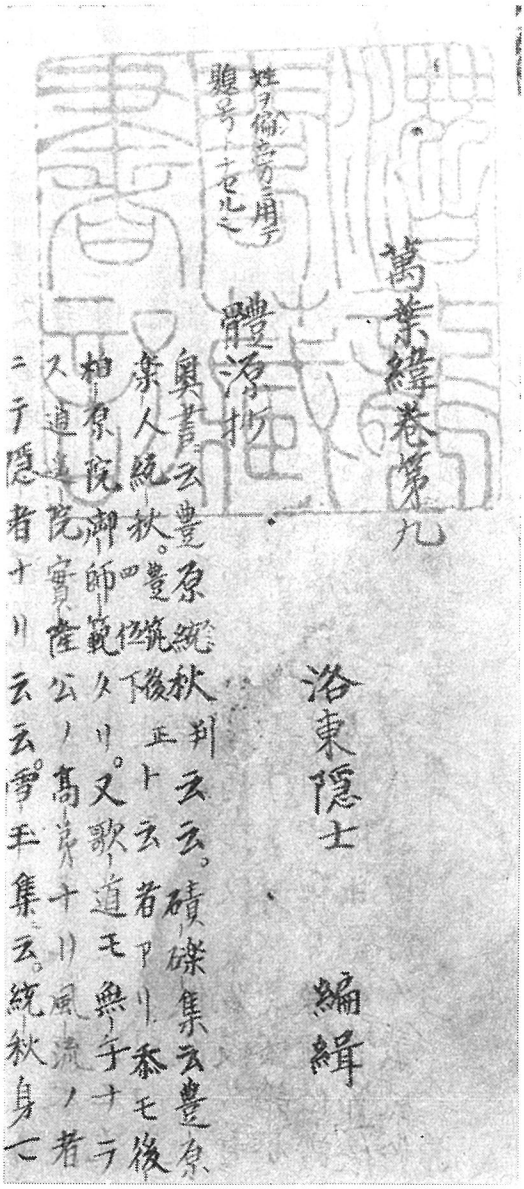


名所ノ卯ノ花　久方のかつら男のしわざとや、月もてかこふ里の卯の花（大阪岸和田佐佐木氏「心の故里」より）

この木下勝俊卽ち長ショウを長流が訪うたのは正保四年、長流は若年二十三歳となされておるが、當時師長ショーは旣に老い、その滿三年後慶安三年、六月、八十一歳の天壽にて終わっておる。その接咳はゴク短いが、盖し若くからその驍名を仄聞し、あこがれて慕っておったので、この時初めて親しく謂わば面接の科第を通り、種々の懇敎を獲、爾後、長流は終生忘れなかったのであろう。

以上は長流と長ショーとの歌道に於ける表面的、傳承を述べたのであるが、長流はその出生が大阪に近い大和ノ國龍田と言い、後に大阪に出たことなど、この長ショーの一門、豐臣族に臣事關係、更に憶測すればドコかに血緣的緣由があったのではないかとも考えられる。この木下流の家系は寛政重修家譜新刊本、第十八冊、千百八十三卷に出で、

勝俊はその後、慶長五年の關ガ原後同十九年に舊節を持し、爲めに六萬二千石を沒收され、入京し初め洛西大原野小鹽山に後に東山靈山に閑居し前記の通り八十一の天壽で終わった。長流撰の萍水和歌集中に木下知房の出詠があるが系譜、勝俊の弟、利房があり、或いは知房は刊本誤りで同人とも思われる、前、拙稿既述の如く長流の生家小崎氏は、大和小泉藩主、片桐氏に仕えた。この片桐は信州伊奈片桐の出自、源姓初め近江淺井長政に後、秀吉に屬し、有名な賤ガ嶽七本鎗の一人の市ノ正且元（元和元年、五月、二十八日、大阪落城直後病死五十九歳）の弟、主膳ノ正、貞隆（寛永四年十一月卒）の男、初名、貞俊のち貞昌は慶長十年生れ、長流に長ずる十八歳、領知の祿額は遞減して一萬六千石余であるが、京東山の知恩院の擴張改築の普請奉行に當り、業間、文雅に潛心、小堀、金森、松花堂らと雅交を結び、



長流門人，今井似閑自書
（彰考館藏）

茗聖、利休の孫弟子桑山宗仙に茶道を學んで奥を究め、更に京大德寺第百八十六代出世の名緇流玉舟宗璠に參禪し宗關居士號を受け、寛永五年、江戸に出府、柳營秘藏の名物茶器を鑑し將軍家綱に点茶を獻じ遂に小堀の後塵を受けて將軍家茶道師範に推され、有名な「石州三百箇條」を呈進し、延寶元年十一月、六十九歳で終った。この貞昌その石見ノ守を援いて石州流茶道の開祖家である。

森銑三さんによると、長流の仕えたのは、時代から推して、この一族庶流で且元の第四子（給祿三千石）又七郎且昭（元祿元卒）かとされたおり、卽ち長流が江戸下向したのは、この藩主、貞昌の參覲に隨從したのである。卽ち長流の實家、小崎更に或いはその母の下河邊氏も、この藩士家でなかろうか、近世和歌史（佐々木信綱翁著）には、下河邊縫殿行忠の、安藤内匠爲實（水戸光圀に招仕の年山爲章の兄）あての一筆札をあげ、爲實の壽藏碑によって、その妻が下河邊氏であるが行忠は長流より少し時代が後であることを指摘し、後生の探究を俟つ旨、解說に附記されてあるが、一寸調べられない、序乍ら先年大阪の高校勤務の市村其三郎教授が、何かに小泉藩と長流とについて記されたものを見た記憶があり、偶然、市村さんが近年東京に移られた由を知ったので、電話で伺ったが氏はタシカに當時小泉藩の故老、南繁則翁から聞知した事を書いたことはあるが、早や數十年の昔の事、具體的の史實などは記憶がないとの事であった。

なお念の爲め姓氏家系大辭典によって稱號、下河邊氏を檢索すると、藤原秀郷流で下總ノ國葛飾郡に下河邊の庄名があり、ここから出た一族が上京し、源平時代・源氏に屬し、平治物語に下河邊藤三郎の名が出ており、源平盛衰記には藤三郎行親あり、下って室町時代に管領上杉氏に屬して、下總ノ國古河城を占據した三郎朝行が出ておるが、その後の結びつきは知る由もない。

又、長流選集の庶民諸家の歌集林葉累塵集（二十卷）には、各處に小崎忠秋の出詠が見られる、あるいは彼れの緣類かと思われるが、殘念乍ら知られない。次の一首をあげておく

題、女郎花　春の野にわきて根よけに見し草は女郎花とや秋は咲くらん

要するに時勢の變迁、戰國は終わって德川時代、前代の武辨英雄の成敗のあとには、例えば豐臣の遺臣の如きは、あるいは節を屈して、德川氏及びその傘下諸家に仕えたものもあるが、田野に隱れて歸農したものも多い、殊に近畿にはこの豐家遺臣が多い筈である。この中、屈節者の中には、世を憚って、自らも傳えず、他にも語らず、遂に眞傳を失った者が隨分多い、管見、手近な處では泉北の舊家伏屋（契沖歸寓支援の）は、大阪籠城の殉節飛驒ノ守一安で、一安以後、高階姓に改姓、有名な安井道頓卽ち土木工業家で、秀吉に仕え私費を投じ道頓堀を開サクし、又、大阪落城の際、八十三歳で殉節、現在、日本橋畔に豐碑を傳えておる哲人（大正三年贈從五位）の如き、その一族後裔某はその後八尾市久寶寺の私塾鱗角堂を建てておる、卽ち種々の實證人物が管見にも拾えるが思うに長流の小崎、下河邊氏も恐らく左樣な經過をとった一族で、その出自素性の端片を契沖その他の門人達に語ったか知らぬが、系統ない片鱗談で、契沖も著錄倥偬これを殘さず遂に長流の代、小泉、片桐氏に仕えた以外くわしく知る由なきに至ったのであろう。

次に長流の和歌と哥學更にその萬葉注釋について、簡約記しておく。

長流が近世、大阪に於て和歌を以て多くの有名無名人を訓化したことは、傳えられるその門人の顔ブレによっても知られ（前年拙文）正に近世大阪の斯道草わけ人である。長流の著作に見られる言說は、實に親切行屆いておる。その著續歌林良材集等の如き謂わゆる類題の書記を見るに、室町期成行した和歌類題書の筆域を擴げて、彼れは名所その他、故事の說明解釋を加筆しておる。實に長流の特色學殖を窺えるもので、この書は彼れ生前の延寶五年刊であるが、後世の文政元年、新歌林良材集と改題されて江戸須原ヤ、京の、伏見ヤ、秋田ヤ、大阪の河內ヤ、奈良ヤが版元となり再刊されておることによっても、その訓化の永く忘られず、文敎に益した現實が窺われるのである。この書は又、和歌秘密抄の目をも獲ておる。かかる懇切丁寧によって大阪庶民に多くの門弟を得、それらの援助推擧によってか、彼れの著述は歌仙抄二卷（萬治二年己亥八月下旬、大阪、宮木平兵衞門板）枕詞燭明抄三卷（寬文十庚戌孟春吉日、西澤

太兵版行）林葉累塵集二十卷美濃版現在希覯本（寛文十庚戌暦初秋吉辰）上刊、萍水和歌集二十卷、この書は林葉の後集の如く、勸めによったか、その九年後、延寶五年頃に刊されておる。これらは何れも長流生存時である。當時の出版は他から類推すると、大體百部前後位、有名な洋醫書の如きは、門人の豫約によって刷板した樣で、ゴク少ない二三十部位の樣であり、ダカラ今日傳はるもの少ない。長流のはモット多くそれらによって門人に更に門人を通じ多く讀まれた樣で、その文教與益の功は大きいのである。少し當時の木版出版にふれるが、かの德川初期慶長勅版の板行から、多くの漢籍が上刊せられたことは著名で勅版には日本紀神代卷も加えられてあるが、その他は和書特に歌書では漸く幕府連歌師に聘せられた拾穗軒北村季吟の源語湖月抄、枕春曙抄の上刊が見られる位である。それに比べば、何の肩書もない市井歌人の長流著錄の叙上、生前早期の出版は如何に長流歌風が好學の庶民にウケたかを卜知せられる。

この歌道執心から勘案の末、わが國和歌の源流の研究に心動き、遂に萬葉集研究に實に精根を打ち込んだのである。當年、博學の貝原益軒が大坂の好學四書や加助卽ち五井持軒守任（長流和學高弟）に贈った狀に

下河邊長流老猶ご堅固に入らせられ候ヤ、足下にも萬葉ご傳授なされ候はんと存じ候

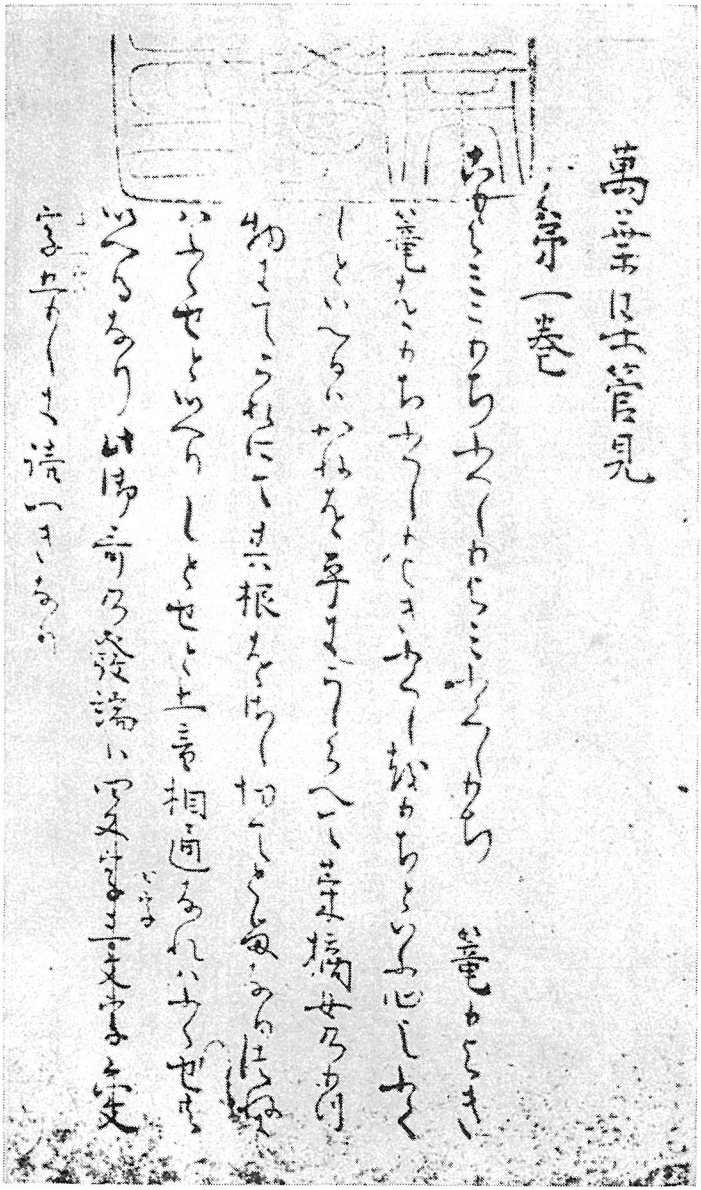
とある。卽ちその名、殊に萬葉執心は博學で交り廣かった益軒にも知られておったのである。益軒は九州、福岡藩儒寛齋の男、名は篤信、長流より四年の弟であるが博學、正德四、八十五の天壽を生きぬき、その間、儒書の譯書、衛生教訓書、各地の地誌名勝記、眞に充棟の書を上刊し、殊に教訓書、養生訓、女大學の如きは永年の間再版、再々版せられておる。謂わば相當のセラー書の名をあげた博學益軒の耳目に長流の歌書の上刊が、入っておったのであろう。要するに歌人、歌學者長流の學名はその生前既にその著書により、世に廣く知られ、それが同學同好に傳えられたのである。全集解說の長流傳資料中に、引かれておる後世の和學鬼才上田秋成の「萬葉集會說」に

下河邊長流の管見抄、上古の學問研究に便せし始め也

とあるのは、秋成がドコかで當時未刊の長流の「管見」を見、これを讀んで、長流の歌道教授はこの卓說を口授し

教えたのであろうと感嘆した實情を筆したのである。この長流の萬葉研究が、遂に遠く名君水戸光圀の聰聽に入り、萬葉注釋の委囑を受けたのである。

長流の和歌が明治以後弘く世に紹介されたのは、全く明治三十一年、佐佐木信綱翁（當年二十七歳）が、先考弘綱の



長流自筆（全集より，燒失）

後塵を追うて、續日本歌學全書十二冊を編集東京博文館から發行、その第一冊冒頭に四六版約四十頁を以て長流の自撰晩花和歌集を收載されたのが嚆矢である。

次いで一足飛びであるが大正十四年、又、佐佐木翁の監修、大阪朝日新聞社に於て、契沖全集刊行の機にお招伴の形で、長流全集の併刊を見たのである。

中學時代余は、先妣の勸めで拙舊宅に住まれた稻荷大社大貫眞浦宮司翁に和歌を學び、その雌黄添削を受け、お蔭で成長後、腰折れを作り自ら樂しみ、イササカ和歌の巧拙良否を知り得るツモリ、以下自分なりに長流の作をその自撰歌集から選出し羅列しておく。大貫翁大正十五、六十八才没である。

年内ノ立春　あらはにはまだ立ち出でず年の内は、春の霞も冬籠りして

〃　今日いかに定めて聞かむ鶯の、今年の初音こぞの古聲

若菜ノ歌　河上に洗ふ若菜の籠を荒み、もるを拾ふぞ摘むにまされる

春ノ歌　梅も見よ櫻もならへとばかりに、まづ散りそむる春の沫雪

鶯　鶯の聲する方は折らじとて、うすくやかゝる春のあわ雪

〃　起き出でば騒ぎやすると鶯の、聲ゆゑいとゞ朝いをぞする

梅　難波江の玉藻の床にふす鴨も、浮寐さむべき梅が香ぞする

〃　梅が香はおぼろげならぬ春の夜に、たがならはしの霞む月影

歸雁　ゆく雁を送るとすれど天つ風、えやは吹き折る青柳の糸

雉　み狩野に去年のとだちの跡とへば、妻なき雉子の聲ぞ悲しき

花　み吉野のたか木の櫻世離れて、濁りにしまぬ花の白雲

〃　逢坂は道ゆく人も絶えにけり、志賀の山越花になるより

落花　櫻狩雨はいとはぬ木のもとに、うたて雪ふる花の嵐よ
首夏　卯花は雪と見ゆとも寒からじ、いざ夏衣うすくたち着む
残花　夏衣なほ山寒くたづね見む、残る櫻の雪にあふやと
郭公　去年の夏聞きもふるさでいとゞしく、今年待たるゝ時鳥かな
〃　百千鳥さへづる春にあらそはで、遅れてまさる時鳥かな
五月雨　みつ潮も爭ひかねて流るめり、堀江の水の五月雨の頃
夏ノ歌　袖毎に扇ばかりの動きつゝ、草木は風も見えぬ頃かな
立秋　身にしみて心にぞしむ涼しさに、悲しさたぐふ秋の初風
〃　せば衣の胸あひ難き隙間より、身にしむけふの秋の初風
虫　夕まぐれ野山の虫の聲々は、日ぐらしにこそ催されけれ
〃　はかなかる命を露にかけながら、名のみ千鳥のまつ虫の聲
霧　關こえて打出の濱にけさ見れば、近江は霧の海にぞありける
月　秋の水天の川よりまづ澄みて、洗ふか月の光まされる
〃　てる月も秋の今宵の名取川、數さへ見ゆる瀬々の埋木
〃　秋も秋ところも所廣澤の、池のも中にすめる月影
〃　雲もなくなぎたる夜半の風の上に、月はありかを定めてぞすむ
〃　天の原月の都の高殿は、夜さへ打ち日さすかとぞ見る
雁　遠きつらは只一筋に見えし雁の、近づく空に數ぞわかるゝ
紅葉　たつをだに惜しといひけむ唐錦、野山に捨つる秋のもみぢ葉

隣家ノ紅葉（契沖出題）　垣こえて許さぬを引く小女子が、袂の色に似たるもみぢ葉

初　冬　霜とだにまだ一夜にはおきかへぬ、昨日の露やけさしぐるらむ

霜　宮木野の木の下草に冬のきて、むすべる霜は雪にまされり

氷　諏訪の海の氷の上に荷を積みて、馬を船とも渡す頃かな

〃　霜をふむ木曾のかけ橋末遂に、氷に似たる諏訪の水うみ

（注、外二首、木曾路の詠あり、江戸下向の往復いづれかに中仙道を通れると思われる）

雪　高砂の尾上の鐘の霜の後に、ひゞくを聞けば松の雪折れ

炭釜ノ烟織ッ（契沖ノ題）　小野山に炭やく賤のをだまきの、糸に烟もよられてぞゆく

歳　暮　何をして暮れにけりともなき年の、心はづかし慕ひしもせず

戀　ノ　歌　馬はあれどかちより渡る木幅（コワク）川、こは誰が爲にぬるゝ通路

無常ノ心　こし方は更にもいはじ行末も、同じ夢にて過ぎぬべき世を

述　懷　世にふればうき事にのみなれ衣、早くぞ墨に染むべかりける

〃　和哥の浦にいたらぬまでも紀の國や、心なぐさの大和言の葉

（注、和哥ノ浦、玉ノ島に和哥三神〔人丸加う〕を祭る、名草は紀ノ國の郡名）

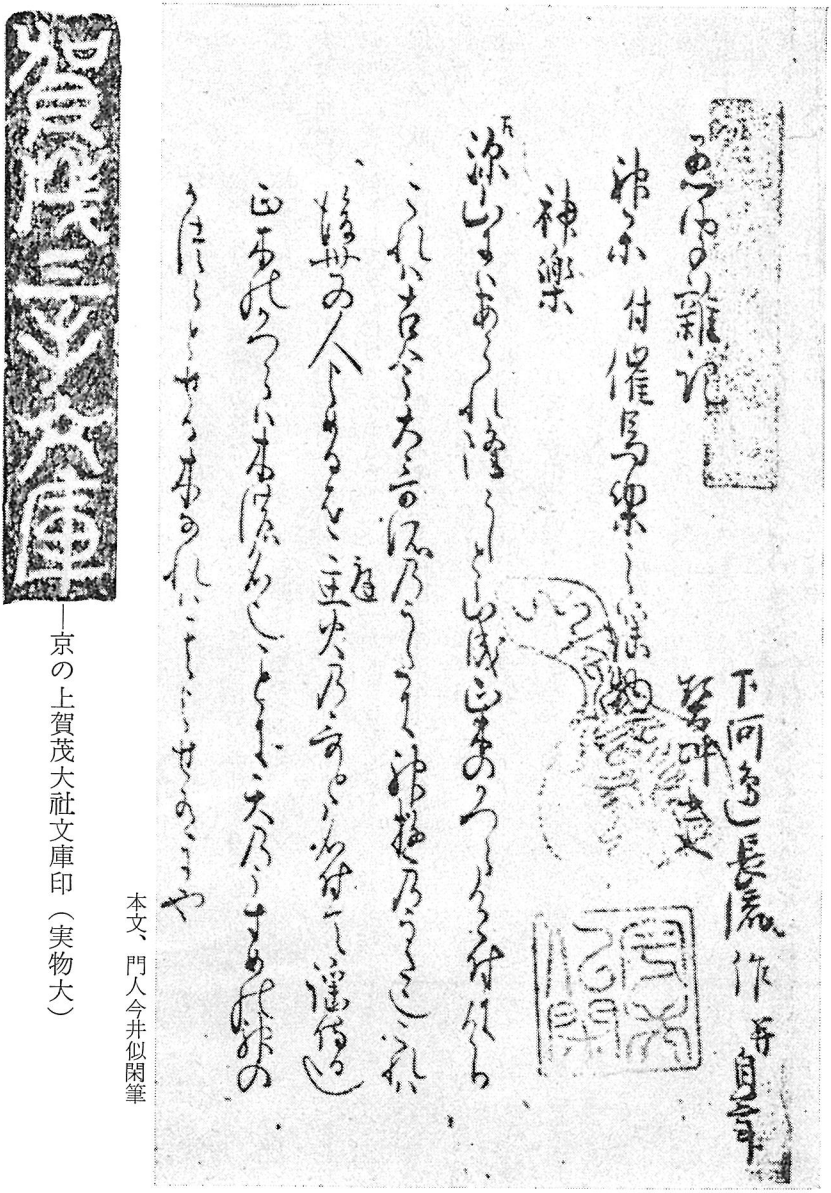
〃　世の中のわたらひ草をふみからし、山路の蕨いつかつまゝし

故　郷　遂にわがきても歸らぬから錦、たつ田や何の故郷の山

富　士　山　ふじのねにのぼりて見れば天地は、まだいく程も別れざりけり

（注、富士ノ山多く詠んでおる、登山した如き實景もある）

長ショウ師を　後瀬山これより後の世々ふとも、又やは生ひん椎の一本



—京の上賀茂大社文庫印（実物大）

本文、門人今井似閑筆

（長流全集より）

長流を最も深くそして細密に研究されたのは、東大の言語學者、故橋本進吉教授である。昭和廿年六四才没。

同教授は福井縣敦賀の産（明治十五年生れ）父君謙吉翁は大學東校で學ばれた醫家であるが教授五歳の時物故、その長男で京都三高から東大に學び、國文學の大宗、上田萬年翁に學び、永年その研究室にて言語音韻の學を修め、その學殖斬然頭角を抜き、專攻部門の外、大正五年より約十年間、東大の囑命により萬葉集校訂に當たり、又學術振興會から萬葉集英譯を囑せられた、その間、佐佐木翁らと共に前記、契沖、長流全集編集に當られた。かくて、緒余、研究が延轉して長流に及んだのである。

橋本教授の長流研究は頗る眞摯、凡て肯綮に中した觀がある。これを例えば長流の力著、萬葉管見二十卷は教授の苦辛によって始めて、その精緻の全貌が突き止められ、紹介され、その他にも長流著書についての基盤が確定したもの多く、それらの結晶が遂に長流全集の作集となったのである。それらの研究の經過については、國語と國文學、國學院雜誌、東亞ノ光、自然、心の花などの諸誌に發表されておる。その中で私が特に注目、敬讀したのは

一、管見（萬葉集）の說は、從來（注、その時代まで）の諸書に負う處多しと雖、更に一歩を進めて、著者獨創の見を加えたことは、長流が、この書を管見と名づけたこと、又、萬葉集名寄（長流著四卷、集中の名所その他の考證）の序に、「僻案の注釋をさへ所々に書きつけ侍りぬ」と言える事、更に似閑（今井）の代匠記の序に、長流が「古人の說に私の意を加へ」管見抄等を著述せりと言える事等によって推測し得べきのみならず、管見の說が、古來の注抄を集めて大成せる拾穗抄（注、北村季吟の萬葉注釋）に引用せられたることと、他書に出處を認むる能わざるものあるとによって明らかなりとす、

と、卽ち長流獨創の見多きことを述べ、また長流が古歌の解釋に、非凡の識見を有したることは、歌仙抄、百人一首三奥抄（注、何れも長流著）などを讀めるものの等しく認むる處、この彼れの管見に於ても、その說多くは妥當にして古來の諸說の可否を判斷して謬らず、處々自己の創案を出して、よく當を失わざりしを見る。中略……

當時に於ては最も進歩したるものと言うを憚らず、契沖が萬葉解釋を試むるに當たり、此書（長流の「管見」）を以て底本となせしは、洵に當を得たりと謂うべし（國學院雜誌）更にまた、雑誌「自然」に、管見について殆んど結論的に

水戸彰考館藏「管見寫本」

前略代匠記初稿本の中に「管見」の文と一致する個處が至る所に發見せられるのであって、契沖は管見を土臺として、これに例證を加え、私見を添えて代匠記を作ったものであることが明らかになり、管見は實に、江戸時代に起こった萬葉集の新注釋の源泉として、萬葉研究史上、重要なる位置を占むべきものである事が知られるのである。また契沖は代匠記序に（初稿）

長流がまだいと若かりし時、かたばかり記しおけるに、おのが愚かなる心を添えて萬葉代匠記と名づけてこれをささぐ（注、代匠記の匠は十五年々長の長流を指しておる）契沖は實に雅量の善人で、亡き師友の長流を立てておる、ささぐは水戸へ呈進したこと（長流の遺蹤をうけて）

これらの説明は決して後人の契沖の學的價値を低減するものでなく、ムシロ却ってその眞相を傳え、而して亡き長流の遺業を明白にして、そして契沖自らの大成した考證との限界を明示し傳えるのであろう。

這回、長流碑の修復再建に際して、私はこの冗文を記して、いささか前賢各位が碩學、長流に寄せられた厚意を披瀝したのである。終りになお、この度の長流碑の再興については、故佐佐木翁の女婿であり、永年契沖研究に執心した盟友、久松潛一さんには兼ね兼ね話し、若し着手實現の節には携手相語らう筈であったが、氏は余より五年若い身で、今年三月、先んじた。マコトに殘念である。思えば五十數年前、大正年中、卽ち氏は學生時代、二三年續けて毎年夏休み余の稻荷舊宅に來訪し、一年は、大阪に行を共にした記憶がある、在天の芳靈に、この際の修復再興の長流碑の照覽を請うこと頗る切である。